

「ゴトン・ロヨン」概念の誕生と変容

——植民地期末期からスカルノ期まで——

ぐみ さわ ひで お
楳 沢 英 雄

- はじめに
- I 「ゴトン・ロヨン」の起源
 - II 日本軍政当局の用いた「ゴトン・ロヨン」概念
 - III スカルノの用いた「ゴトン・ロヨン」概念
 - IV クンチョロニングラットによる「ゴトン・ロヨン」
概念の精緻化
- おわりに

はじめに

2001年8月9日、インドネシア共和国初代大統領スカルノの長女メガワティは、第5代大統領として初めて組閣した内閣の名称をゴトン・ロヨン内閣（Kabinet Gotong Royong）とすることを発表した。しかしこのとき、メガワティ大統領はこの名称の由来について語ることはなかった^(注1)。ゴトン・ロヨンという概念もゴトン・ロヨン内閣という語法も、もともとその始まりはメガワティの父スカルノにさかのぼる。

1945年6月1日の独立準備調査会の席上、インドネシア共和国の国是となるパンチャシラの構想がスカルノによって発表された。このときスカルノは、パンチャシラ（建国五原則）をひとつの原則で表現するなら、それは純粋なインドネシア語であるゴトン・ロヨン（gotong royong）である、と述べた。その後スカルノは、「指導される民主主義」期（1959～65年）が始まる前頃から、用語ゴトン・ロヨン（以下「ゴト

ン・ロヨン」と表記する）を演説で頻繁に使用するようになった。スカルノに代わったスハルトの新秩序体制期では、「ゴトン・ロヨン」はパンチャシラ道德教育の教科書に取り入れられ、スハルト体制が公定する「ゴトン・ロヨン」の概念の普及が学校教育などを通じて図られた。同時に、この言葉は政府の開発経済政策遂行の一翼をになう国民文化のひとつとして、政策的にも位置づけられた^(注2)。インドネシアの政治、文化面における、用語としてのこのような華々しい経歴にもかかわらず、「ゴトン・ロヨン」概念の誕生と変容プロセスについては明らかにされていない。

「ゴトン・ロヨン」の概念自体についての研究は、管見するところ極めて少数である。その中で代表的な研究としては、クンチョロニングラット（Koentjaraningrat）によるものとジョン・ボーウェン（John R. Bowen）によるものが挙げられる。

クンチョロニングラットは、1958年から59年にかけて中部ジャワで行われたゴトン・ロヨン慣行調査についての論文で、「ゴトン・ロヨン」という言葉は、大衆向け宣伝用印刷物や新聞などでしばしば用いられるが、通常、意味を明確に定義されずに用いられている。（中略）ゴトン・ロヨンに基づくインドネシア社会を作り上

げようという願望や努力といった、観念論的な意味での理想とは別に、現実的な視点から理解される、実社会におけるゴトン・ロヨンおよびその原理を知ること我々インドネシア人には必要である」[Koentjaraningrat 1961,2]とし、実社会における「ゴトン・ロヨン」の概念が、この時期にはまだ明確にされていなかったことを述べている。

この調査から15年ほど経った1974年、クンチョロニングラットは、「スカルノ時代ほどゴトン・ロヨンという言葉は頻繁には現われないが、それでも開発の社会文化面について議論していると、実際のところゴトン・ロヨンとは何だろうか」と尋ねる知識人が何人もいる」[Koentjaraningrat 1974,59]と述べており、この時期においてもインドネシアの知識人層ですら「ゴトン・ロヨン」の概念を明確には把握していない様子が窺える。

それから約10年経過した1986年に、ジョン・ボーウェンが論文「伝統の政治的構築について——インドネシアのゴトン・ロヨン——」を発表した。この論文は、国家が村落社会に介入するためのイデオロギー的手段として「ゴトン・ロヨン」を活用した、という面から「ゴトン・ロヨン」の概念を捉えたものである。一例を挙げれば、公共事業工事への住民の無償労働力の提供促進手段として、「ゴトン・ロヨン」概念を利用したことが挙げられる。ボーウェンは、スハルトの新秩序体制下で、この国家介入に対する村落の反応は、服従から消極的抵抗にまで及んでおり、その反応の違いは、地方における正当性と義務に対する考え方の違いによるものだという。その反応の対照的な例として、村民の権利と義務が歴史的に統治者への労働提供を

含んでいるジャワの地域社会と、そのような要求が歴史的正当性を有していなかったアチェ(Aceh)のガヨ(Gayo)の地域社会を取り上げ、その違いを示している。

この論文の中でボーウェンは「ゴトン・ロヨン」という用語が3つの連続するプロセスを経て、インドネシアの政治文化的権力システムの重要な構成要素になったことを示す」[Bowen 1986, 545]としている。しかし、ボーウェン論文の3つのプロセス、すなわち(1)地方文化の実態に対する意図的な誤認識、(2)この誤認識に基づく国民的伝統の構築、(3)国家による文化表象を用いた農村への戦略的介入、村落内労働力動員戦略、においては、後述するように「ゴトン・ロヨン」の起源が示されていない。またプロセス(1)と(2)が、いつから誰によって始められたかが示されていない。これに伴い(1)から(2)へのプロセスが、どのような連続プロセスであるかが示されていない。

以上見てきたように、これらの先行研究では、「ゴトン・ロヨン」概念の誕生と変容プロセスについては、明確にされていないのである。

「ゴトン・ロヨン」はインドネシアでも日本でも、通常はインドネシアの古くからの村落慣行と理解され^(注3)、日本では相互扶助^(注4)と訳されている。本稿では、「ゴトン・ロヨン」の誕生を跡づけ、その用語がより抽象的な概念として成立し、その概念の意味内容が変化していく過程を歴史的にたどっていく。そして、このことによって単に相互扶助に還元できない「ゴトン・ロヨン」の多義性に注目しようとするものである。

本稿の目的は、「ゴトン・ロヨン」概念の誕生に特に深い関わりを持つと思われる植民地期

末期からスカルノ期に焦点をあて、「ゴトン・ロヨン」概念の誕生と変容のプロセスを、文献資料を通じて明らかにすることである。これに関連し、スカルノが用いた「ゴトン・ロヨン」概念とは何か、そして同時に、スカルノが用いた「ゴトン・ロヨン」概念を「ゴトン・ロヨン」の一般的な日本語の訳語である相互扶助（助け合い）として捉えることの妥当性について、さらにスカルノの政治理念としての「ゴトン・ロヨン」概念の位置づけの変化についても触れることとしたい。

前述したように、スカルノはパンチャシラをひとつの原則で表現するなら、それはゴトン・ロヨンであると述べ、独立準備調査会の委員達^(注5)から拍手喝さいを受けた。このとき「ゴトン・ロヨン」は、インドネシア国家統合のキーワードとしての位置づけを得た。さらにその後スカルノは「指導される民主主義」を唱え、「ゴトン・ロヨン」を西洋民主主義の対抗理念として盛んに用いる。この意味で「ゴトン・ロヨン」の概念は、スカルノが唱えた社会民主主義、社会民族主義の一面を示すものと見ることができる。以上の点から「ゴトン・ロヨン」概念の誕生と変容を探求することは、独立に向かった時期のインドネシア国家の統合理念、およびスカルノの唱えた民主主義思想を探る道標のひとつとなりうるであろう。

以下、第Ⅰ節で「ゴトン・ロヨン」の起源について、先行研究の検討と植民地期の辞典等における「ゴトン・ロヨン」の掲載状況を取り上げる。第Ⅱ節では、日本軍政期における「ゴトン・ロヨン」の概念を取り上げ、日本軍政当局の資料に使用された「ゴトン・ロヨン」を抽出し、その概念を明らかにする。第Ⅲ節では、ス

カルノが使用した「ゴトン・ロヨン」を取り上げ、その概念について伝統性とスカルノの与えた位置づけを中心に検討する。最後に第Ⅳ節で、スカルノの政治理念としての「ゴトン・ロヨン」概念の提示に対して、農村における相互扶助慣行と「ゴトン・ロヨン」の関連づけを行い、「ゴトン・ロヨン」概念の具体的な精緻化を図った、クンチョロニングラットによるゴトン・ロヨン慣行調査を取り上げる。

I 「ゴトン・ロヨン」の起源

「ゴトン・ロヨン」の初出について、クンチョロニングラットは「ゴトン・ロヨンという言葉の初出は、慣習法の著作、特に東ジャワの農業社会に関するオランダのワーヘニンゲン学派の農業専門家達の著作に見られるようだ」[Koentjaraningrat 1974,59]と指摘しているが、初出の具体的な文献は提示されていない。この指摘は以下に示すように、「ゴトン・ロヨン」の初出ではなく、オランダの農業経済学者による東部ジャワ村落における相互扶助慣行についての記述を示したものである。

クンチョロニングラットは、インドネシア語で記述された同書において、オランダの農業経済学者コルフ（Kolff）の著作におけるゴトン・ロヨン慣行に関する報告内容を取り上げている[Koentjaraningrat 1974,61]。この報告内容について、クンチョロニングラットはゴトン・ロヨン慣行と記述しているが、オランダ語で記述されたコルフの著作の該当部分[Kolff 1937,3-72]では、オランダ語で相互扶助を意味する *wederkeerig hulpbetoon* もしくは *wederzijdsch hulpbetoon* が用いられており、「ゴト

ン・ロヨン」は見ることができない。

前述のボーウェン論文では、「ゴトン・ロヨン」の起源について「ゴトン・ロヨンという言葉は、一般的にインドネシア人によって、古くからあるジャワ語の表現と理解されているが、どうも比較的最近作られたインドネシアの言葉らしい」[Bowen 1986,546]と述べるにとどまっている。

これらの先行研究においては、「ゴトン・ロヨン」の起源は明確にされていない。そこで辞典等における「ゴトン・ロヨン」の掲載状況を取り上げ、検討することとする。「ゴトン・ロヨン」は、ゴトン (gotong) とロヨン (royong^(注6)) の合成語であることから、ゴトンとロヨン^(注7)とゴトン・ロヨンに関わる記述に注目する。

1817年に出版されたラッフルズ (Raffles) の『ジャワ史』の語彙比較表にジャワの語彙としてゴトンが掲載されており、肩に担いで運ぶという意味が記載されている [Raffles 1994, cxliii]。

次にジャワ語オランダ語辞典について見ると、1901年版のジャワ語オランダ語辞典^(注8)には「ゴトン・ロヨン」の項目はない。音が似通っている gotong royom が、「共同で出費を負担する」という意味で掲載されている。また gotong は、「2人以上で一緒に行うこと」となっている [Gericke 1901b,577]。一方 royom^(注9)については掲載されておらず、royong の項には「？」が付き^(注10)、rinoyong, rineyong が掲載されている。意味は「ゆれる」、「ふらつく」である [Gericke 1901a,359]。

マレー語 (インドネシア語の前身) 起源の可能性を検証するため、マレー語辞典について見ると、1903年発行のマレー語英語辞典には、

gotong, royom, royong は、いずれも掲載されていない [Wilkinson 1903]。

オランダの法学者、フォレンホーフエン (Vollenhoven) の指揮のもとに行われ、インドネシア各地の民族誌の体系的調査結果が収録されている、1914年から55年にかけてオランダで刊行された『慣習法集成』全45巻中には「ゴトン・ロヨン」の記述はない。gotong については唯一、1917年の東ジャワ、トゥルンアゲン (Tulungagung) の調査結果として、被相続人の借金を相続人が全員 [共同]^(注11)で支払う、という意味で記述されている [Vollenhoven 1919,98]。

1917年から40年にかけて刊行された『蘭印百科事典』^(注12)には、「ゴトン・ロヨン」は見当たらない。

1932年発行のマレー語英語辞典には、「ゴトン・ロヨン」の項目はない。gotong は、パタヴィア地方の語とされ、「非常に重いものを運ぶこと」、「2,3人がかりで荷物を運ぶこと」という意味で掲載されている [Wilkinson 1932a, 376]。また royong は、「①よろめくこと」、「②物語」という意味で掲載されている [Wilkinson 1932b,350]。

後述するが、スカルノが、その著作集において、初めて「ゴトン・ロヨン」を用いたのは、1933年に書いた論文においてである^(注13)。

1938年発行のジャワ語オランダ語辞典^(注14)には、熟語として gotong royom (-royong 方言) が、「力を合わせて」、「共同負担で」という意味で掲載されており、「ゴトン・ロヨン」は gotong royom の方言となっている。gotong は、「一緒になって運ぶ」という意味で掲載されており [Pigeaud 1938,143], royom は単語として

は方言とされ、「①陰の多い」、「②～に加わる、～に合意する」という意味で掲載されている [Pigeaud 1938,500]。

1939年発行の Poerwadarmenta のジャワ語辞典には、「ゴトン・ロヨン」の項目はなく、gotong royom が「一緒に仕事をする」という意味で掲載されている。また gotong は、「①大勢で物を運ぶ」、「②手助けする」という意味で掲載されている [Poerwadarmenta 1939,160]。

一方 royom は、「①見えないよう隠す、涼しい」、「②意見が一致する、集団で話をする」となっているが、その記述の次に royong も掲載されており、「大勢で一緒にものを運ぶ」という意味で「ゴトン・ロヨン」と同義」と記述されている [Poerwadarmenta 1939,535]。以上をまとめると表1 のようになる。

1901年発行のジャワ語オランダ語辞典に「ゴトン・ロヨン」の項目がなく、1938年発行のジャワ語オランダ語辞典に「ゴトン・ロヨン」が掲載されている点に注目すると、辞典編纂者が「ゴトン・ロヨン」を用語として収集したのは、最大限の幅をとって1900年代初頭から1930年代までの間と推定することができる。しかし1938年当時の「ゴトン・ロヨン」の意味が「力を合

わせて」、「共同負担で」、「大勢で一緒にものを運ぶ」ということを考慮すると、「ゴトン・ロヨン」の助け合いの概念は、辞典の上では1930年代には明確になっていなかったことが指摘できる。

II 日本軍政当局の用いた「ゴトン・ロヨン」概念

太平洋戦争中の1942年3月に日本軍はジャワを占領し、同年7月から終戦までジャカルタに現地の中央政府として軍政監部を設置した。この日本軍政期の1944年と45年の軍政当局の資料に「ゴトン・ロヨン」の使用が見られる。

軍政監部の公報である『官報』はインドネシア語で記述されているが、この『官報』で「ゴトン・ロヨン」が初めて使用されるのは、1944年1月10日付の34号における、「隣組の編成遂行の件」と題された記事においてである。ここでは、「ゴトン・ロヨン」の概念は次のように示されている。「軍政監部は、(中略)ゴトン・ロヨンの精神、すなわち献身的に行動し助力を与えるという約束事を有するジャワの住民に昔から根本的に息づいている助け合い (tolong-

表1 ジャワ語辞典等のゴトン・ロヨン掲載状況

発行年	辞典名	gotong	royom	royong	gotong royom	gotong royong
1901	ジャワ語オランダ語辞典	2人以上で一緒に行くこと	—	ゆるる、ふらつく	共同で出費を負担する	—
1903	マレー語英語辞典	—	—	—	—	—
1932	マレー語英語辞典	2,3人がかりで荷物を運ぶこと	—	よろめく、物語	—	—
1938	ジャワ語オランダ語辞典	一緒になって運ぶ	陰の多い、 ～に加わる、～に合意する	—	力を合わせて、共同負担で	*gotong royom と同義
1939	ジャワ語辞典	大勢で物を運ぶ、手助けする	見えないよう隠す、涼しい、 意見が一致する、集団で話をする	大勢で一緒に荷物を運ぶ	一緒に仕事をする	*royong と同義

(出所) 本文中の諸辞典より筆者作成。

menolong) の精神を用いて、字ごとに字常会を開くよう決定した」[Kurasawa 1989, 34号, 19]。さらに半月後に出された次の号では隣組の編成遂行原則、第1条第3項で「ゴトン・ロヨン」は次のように用いられている。「隣組は共同で義務を遂行するため工夫されなければならない。たとえば、昔からジャワ社会に息づいてきたゴトン・ロヨンの精神に基づく住民間の助け合い (tolong-menolong, bantu-membantu) などのように」[Kurasawa 1989, 35号, 13]。これらの記事からは、軍政当局が隣組を通じた勤労奉仕の推進を意図し、ジャワの伝統として「ゴトン・ロヨン」を持ち出し、これをインドネシア語の助け合いという用語と結び付けていることがわかる。

1944年2月25日付の『官報』37号では、軍政期に組織されたインドネシア語整備委員会において、使用が承認された新語としてゴトン・ロヨン (gotong royong) が掲載されており、その意味は助け合い (tolong-menolong) となっている [Kurasawa 1989, 37号, 31]。

1944年5月25日付の『官報』43号では、中央参議院第3回会議での最高指揮官の諮問への回答が掲載されている。中央参議院も遺憾とする認識として、「1. 聖戦における最終勝利の達成に対する責任についての住民側の理解不足 2. 民族、職業、階級の相違を意識しない友好的雰囲気における協同活動 (kegiatan bekerja bersama-sama) 不足」[Kurasawa 1989, 43号, 29] を挙げた後、これに対する意見具申のひとつの中で「ゴトン・ロヨン」が取り上げられている。「〔これらのことを〕理解し、〔その理解を〕促進するためには、ゴトン・ロヨンの性格を強化し、家族主義 (kekeluargaan) に基づいて生活し、オランダ・ユダヤ政治の残滓としての個人主義

の性格を一掃すること」[Kurasawa 1989, 43号, 29] となっており、1944年8月25日付『官報』49号では、勤労戦士援護会基本規則において「3. 基本 当会の事業はすべて、ゴトン・ロヨンの原則と誠実心に基づく」[Kurasawa 1989, 49号, 23] としている。

1945年に入ると、45年6月10日付『官報』68号における、5月28日の独立準備調査会、開会式の〔ラジマン〕議長演説での「ゴトン・ロヨン」の使用がある。「我々自身の心の中にある敵に関しては、我々は内省し個人的な利益を完全に消滅させることにより、助け合いと純粋なゴトン・ロヨンの性格を作り上げることができるだろう。このことに鑑み、我々がインドネシアの住民、民族をひとつに融合させようという確固たる強い精神と願望を持つようになるために、我々は民族本来の性格を作り上げなければならない」[Kurasawa 1989, 68号, 12] と述べている。ここでラジマンは、助け合いという語と「ゴトン・ロヨン」を区別して用いている点に留意したい。

軍政期に官製新聞社であるジャワ新聞社から、月2回発行された日本語インドネシア語併記のグラビア雑誌『ジャワ・バル』にも「ゴトン・ロヨン」が見られる。

1944年2月1日発行の第3号では、「隣保組織とは何か」と題した記事において「ジャワでも昔からゴットン・ロヨン^{ママ}という美しい慣習があつて、家を建てたり、結婚したりその他色々な場合にカンボンの人々が援け合うということが行われているが、これは正しく隣保相扶の精神である。ただし、このゴットン・ロヨンはオランダ政府時代の抑圧によって何ら組織的なものを与えられず、かつ又、国の行政に役立つと

いうがごときことは、全然なかったのである。また、都会地ではこの精神は段々なくなってしまうのである。今回の隣保組織整備要綱の目的とするところは、この昔ながらのゴトン・ロヨンに新しく力強い組織を与え、住民協同精神の昂揚を計ると共に行政の下部組織として軍政の浸透、防衛の強化、民生の安定等に十分活動できるような組織たらしめようとするところに在るのである」[Kurasawa 1992, 3号, 6]と述べられている^(注15)。この記事においては、軍政の円滑な遂行に資するべく、「ゴトン・ロヨン」の概念は村落の伝統的な慣習と捉えられており、隣人間の助け合いとして提示されている。

この他、『ジャワ・バル』で使用された「ゴトン・ロヨン」には以下のものがある。

1944年3月15日発行の第6号では、「時代の影響」と題した挿絵入り読み物（インドネシア語表記のみ）において、「ゴトン・ロヨン」が見られる。「新しい時代は、ゴトン・ロヨンの精神に基づく東洋本来の性格を有する、新しい風潮ももたらした」[Kurasawa 1992, 6号, 33]。

1944年5月15日発行の第10号では、官報43号の記述内容と同様に「ゴトン・ロヨンの性格を強化し、家族主義に基づいて生活し、オランダ・ユダヤ政治の残滓としての個人主義の性格を一掃すること」[Kurasawa 1992, 10号, 6]と記述されている。

1944年6月1日発行の第11号では、ジャワ奉公会の実践活動の紹介記事が掲載されており、この中で「ゴトン・ロヨン」が取り上げられている。「ジャワにおいては実に何回も歴史の転回が経験されてきた。しかし、民衆の生活においては、ゴトン・ロヨンの精神は現在にいたるまで維持され続けた。ゴトン・ロヨンの精神は、

基本的には奉公精神と同一のものである」[Kurasawa 1992, 11号, 4]。この記事では、ゴトン・ロヨンの精神はジャワの伝統的なものであり、奉公精神と同一のものと措定している。

日本軍政期の資料に見る、これらの「ゴトン・ロヨン」の使用にインドネシアの人がどう関わっていたのかについては、当該記事からは読み取れない。

そこで次に、日本軍政の初期に軍政当局とインドネシア側要人との接点であった諮問機関について触れておく。この諮問機関は、旧慣制度調査委員会と名づけられ、軍政当局にインドネシアの慣習情報、インドネシア側要人との定期的な意見交換の場を提供したものである。同委員会は1942年11月に発足、翌43年10月まで約1年間存続した。1942年11月28日の第1回会合から43年6月5日の第17回会合までの日本語による議事録^(注16)が現存し復刻されている。同委員会のインドネシア側委員には、スカルノをはじめハッタ、デワントロ、マンスール、ジャヤデニングラット、スポモ、スタルジョ、アミスノ、ムリヤ、ブルバチャロコ、イスカンダル・デイ・ナタ、スカルジョ、サルトノといった要人たちが任命され、厚生問題、失業問題、教育問題、食糧問題、慣習等の史的考察、移民問題について活発な意見交換がなされている。

この第1回会合から第17回会合までの議事録^(注17)において、日本語ではあるが、相互扶助と訳された文言が散見される。1942年12月26日の第3回の議事録に添付された、第2回厚生委員会における原住民委員報告において、スポモは、「過去10年間に失業問題に携わったオランダ政府を始めその他の機関は、その仕事を二つに区分しておりました。即ち都市住民中の失業者撲

減、並びに、農村民衆に関係ある、ないしは農村民衆の失業問題が之であります。彼らが第一に採り上げたのは、欧州人に関する対策であります。原住民に関しましては、都会住民、それも上層並びに中級職業の者のみに対策を講じまして、数的に多数の都市及び農村の下層職業者の失業は『相互扶助』的に農村民衆の負担によって解決されるであろうとの希望から放置されたのであります」^(注18)と述べている〔戸田 1995a,143〕。

この他、旧慣制度調査委員会議事録における相互扶助という文言は、次のように使用されている。1943年1月5日の第4回の議事録において、スポモは、「農村ではこちらの住民間の古い慣習としまして、相互扶助の習慣がありまして」〔戸田 1995a,199〕と述べ、43年3月22日の第10回の議事録においても、スポモは、「例えば寄付行為はインドネシア人の相互扶助の精神の表現であり、施物行為は人類の日常生活における相互間の紐帯を強化するものであります」〔戸田 1995a,407〕と述べている。

スポモ以外ではデワントロが、1943年1月15日の第5回の議事録において、「唯物主義、唯知主義の風潮の他、西歐式教育制度は更に個人主義という疾病を発生し、東インド社会の美風であり、慎ましく平和な生活の基礎である家族主義、相互扶助の風習を廃せらるに到ったのであります」〔戸田 1995a,263〕と述べている。また、イスカンダルは、1943年4月26日の第13回の議事録において、「精米業組合の事業の傍ら、農業関係官憲と農民間の連絡を緊密化する必要があり、かくて始めて農村の相互扶助の制度に基づく生活向上を図り得るのであります」〔戸田 1995b,545-546〕と述べている。

この議事録に書かれた相互扶助が、発言時に「ゴトン・ロヨン」であったのか、トロン・ムノロン (tolong-menolong) であったのか、あるいはバントゥ・ムンバントゥ (bantu-membantu) であったのか、あるいはこれらが混在したものであったのかは不明である。しかし、日本語で相互扶助と訳された概念が、インドネシア農村社会に古来存在すると主張した者が、1942年から43年に活動したこの委員会のインドネシア要人の中に存在したことは少なくとも確かである。そして1944年のジャワの隣保制度（隣組、字常会等）正式発足以前に、軍政当局はこの委員会を通じて日本語で相互扶助と訳された概念（「ゴトン・ロヨン」の可能性ある）の存在を知りうる立場にあったことから、委員会での発言内容が、ジャワの隣保制度において「ゴトン・ロヨン」が日本の隣保相扶の精神と同様の概念であるとされた、少なくともそのひとつの契機になった蓋然性は高い。

日本軍政期における「ゴトン・ロヨン」概念とは、日本の隣保相扶の精神と同様の意味を持つとされ^(注19)、ジャワの隣保制度を支える慣習上の伝統的概念として成立するべく軍政当局により普及推進されたものであった。

Ⅲ スカルノの用いた「ゴトン・ロヨン」概念

本節では、主に1945年5月以降、つまり独立準備調査会以降に登場した「ゴトン・ロヨン」について、スカルノが使用したものを中心に検討する。これに先立ち、第Ⅰ節で見た辞典の編纂者が辞典に「ゴトン・ロヨン」を掲載する以前の1933年に、スカルノが論文で用いた「ゴト

ン・ロヨン」について取り上げておくことにする。

1. 国家編成原理の基盤としての「ゴトン・ロヨン」概念

スカルノが1926年から41年にかけて執筆した論文、記事、書簡61編^(注20)が掲載された『革命の旗の下に』第1巻において、スカルノが「ゴトン・ロヨン」を使用した著述は、33年3月に書かれた、「インドネシア独立の達成のために」と題された論文^(注21)のみである。

「インドネシア独立の達成のために」は、土屋が「この論文の中には、1930年の法廷弁説以来1933年夏に再び逮捕されるにいたる時期のスカルノの主張が集約されている」[土屋 1994, 153] と評した長文の論考で、全10章からなり、その第9章「黄金の橋の向こうで」に「ゴトン・ロヨン」が1カ所、クォーテーション・マーク付で使用されている。管見するところ、文献で確認できるスカルノによる「ゴトン・ロヨン」の初めての使用である。

「人民は黄金の橋の向こう側で、貴族もブルジョアも階級も資本主義もない社会を作り上げるのだと、平地や山や海を越えるまで声を張り上げよ。

声を張り上げるだけではない！前衛党は、今から社会民主主義と社会民族主義の実践に向けて大衆を教育しなければならず、社会民主主義と社会民族主義を実現する大衆を用意しなければならない。前衛党は、何世紀もの間個人主義の病気に侵されていた大衆が、自分達を常に公衆の安寧を重視する“社会的人間”（“manusia masyarakat”）であると意識する“新しい人間”に変身し始めるように、今やもう、大衆の心の中に友愛と連帯（kesama-rata-sama-rasaan）の

種をまかねばならない。大衆の心の中に“ゴトン・ロヨン”（“gotong royong”）の種もまかねばならない。前衛党は、[大衆に対し] 変わることなく個人主義の悪を示し、“社会性”（“kemasyarakatan”）の理論と実践を教育しなければならない。資本主義という悪を打ちこわし、協同作業（pekerjaan bersama）を提案し行い、革新的協同組合を設立し運営し、革新的労働組合や農民同盟を設立し、その活動を推進しなければならない。特に革新的協同組合、革新的労働組合、革新的農民同盟を！要するに今から闘争において、行動において、政治において、革新的な方法で[大衆を] 社会的人間に変身させるということである」[Soekarno 1963, 322-323]。

土屋は『インドネシア思想の系譜』において次のように評している。「スカルノはこの論文の中で、独立を「黄金の橋」だと言っている。橋には違いないが、それは黄金なのである。したがってスカルノにとって、何よりも重要なのは、この橋に至るための「民族の魂」を鍛えていくことである。スカルノの「民族の魂」は、のちに“ゴトン・ロヨン”（相互扶助精神）として定立される（スカルノは、1933年のこの論文の最後に“ゴトン・ロヨン”という言葉をはじめて使っているが、この時点ではまだ、それは民族の魂そのものとしては意識されていないようである）」[土屋 1994, 155]。

この「インドネシア独立の達成のために」と題した論文において、「ゴトン・ロヨン」についてはこれ以上触れられていない。従ってこの時点でスカルノが「ゴトン・ロヨン」をどのようなものとして意識していたのかは不明瞭である。しかし、「ゴトン・ロヨン」を、大衆にその精神を植え付けなければならないものとして

位置づけている点、そしてそれを伝統的なものとしておらず、むしろ革新的なものとしている点、友愛や連帯と関わりを持つものとして意識している点、そしてクォーテーション・マーク^(注22)をつけている点が注目される。

スカルノが使用した「ゴトン・ロヨン」が次に見られるのは、日本軍政下の1945年6月1日、第1回独立準備調査会の席上での「パンチャシラの誕生」として有名なスカルノの演説においてである。

「もし私が5つの原則^(注23)を3つに集約するなら、そして3つの原則^(注24)をひとつに集約するなら、私はひとつの純粋な(tulen)インドネシアの言葉、すなわち“ゴトン・ロヨン”という言葉に集約することができる。我々が建国するインドネシア国家は、ゴトン・ロヨン国家でなければならない。何と凄いことか！ゴトン・ロヨン国家！（拍手喝采）諸君，“ゴトン・ロヨン”は動的な観念、家族主義よりも動的な観念である！家族主義はひとつの静的な観念である。しかし、ゴトン・ロヨンは、労働(usaha)であり、善行(amal)であり、任務(pekerjaan)を示す。親愛なるスカルジョ委員によって仕事(karyo)と作業(gawe)といわれたものである。我々は、一緒になってこの仕事、作業、任務、善行を完成させよう！ゴトン・ロヨンとは、一緒になって粉骨砕身すること(pembanting-tulang bersama)、一緒になって汗を振り絞ること(pemerasan-kerinkat bersama)、一緒になって助け合う闘争(perjuangan bantu-binantu bersama)である。全員の利益のために全員が善行を行い、全員の幸福のために全員が汗を流すこと。共同の利益のための“えんやこら〔の掛け声〕”(ho-lopis-kuntul-baris)^(注25)。それこそ

が、ゴトン・ロヨンである。（拍手喝采）裕福な者と貧困な者との間の、イスラム教徒とキリスト教徒との間の、純粋なインドネシア人でない者とインドネシア民族となった者との間のゴトン・ロヨンの原則。諸君、これこそ、私が諸君に提案したいことだ」[Yamin 1959,79]。

このときスカルノは、後に国家の存立原理にして国民生活の源泉をなす最も重要な基礎とされることになるパンチャシラ5原則を、1原則に集約したものとして「ゴトン・ロヨン」を位置づけている。この演説における「ゴトン・ロヨン」の概念は、労働、奉仕、善行としての協同（ともに心と力をあわせ仕事をする事）^(注26)であり、国民の一体感を醸成するものとして捉えられている。また、将来のインドネシア国家における階級、宗教、民族といった社会的背景を異にする人々のあいだの統合のあり方を体现する言葉として提案されている。さらにここで、ジャワ語起源の「ゴトン・ロヨン」に、純粋なという形容詞をつけてインドネシアの言葉である、とスカルノが述べている点が注目される。この時期以降「ゴトン・ロヨン」の概念は、軍政期の『官報』や『ジャワ・バル』におけるジャワの伝統的慣習であるという位置づけから、インドネシアのものであるという位置づけに、政治的に変化する。

「パンチャシラの誕生」演説の後、7月15日の第2回独立準備調査会の席上、同調査会議長のラジマンから、スカルノは憲法委員会議長として憲法制定に関する説明を求められている。このときスカルノは次のように述べている。

「実際のところ、体制問題(soal systeem)、基本問題、哲学問題は、独立準備調査会で明確な決定という形をとっていないとはいっても、

我々は「それらを」すでに定めた。独立準備調査会の第1回会議で述べられた基本、すなわち家族主義の基本、もしくは私がゴトン・ロヨンの基本と名づけた基本について、委員全員が満場一致したといってもよい、と私は思う」[Yamin 1959,287]。ここでは、「パンチャシラの誕生」演説における「ゴトン・ロヨン」概念の定着化が、スカルノによって図られていると見ることができる。続いてスカルノは、次のように述べている。

「人権、市民権を内容とする憲法は、餓死する貧困者の飢餓をなくすることができない。そしてそれゆえ、もし我々が、真に我々の国家を家族主義の観念 (faham), 助け合い (tolong-menolong) の観念、ゴトン・ロヨンと社会的公正 (keadilan sosial) の観念に基づかせたいなら、我々の国家から個人主義と自由主義の観念、思想をすべて追い払え」[Yamin 1959,297]。ここでスカルノは、助け合いの概念と「ゴトン・ロヨン」の概念を区別して表現しており、「ゴトン・ロヨン」の概念は、社会的公正の概念に近いものとして位置づけていると解釈することが可能であろう。スカルノはさらに次のように述べている。

「勇気とは以下のことを示している。我々が他国の憲法の例に追随するだけでなく、個人主義と自由主義に対抗する公正の観念の内容を持つ、つまり、家族主義とゴトン・ロヨンの精神を持つ自分達自身の新しい憲法を作ることである」[Yamin 1959,298]。これは、スカルノが「ゴトン・ロヨン」概念の憲法への取り込みを図っている発言と見ることができる。

次に、前述の独立準備調査会の席上で、スカルノが用いた「ゴトン・ロヨン」に対して、同

調査会の委員でもある、後の初代副大統領ハッタと法学者スポモが、「ゴトン・ロヨン」をどのような意味で用いていたかについて触れておく。

ボーウェンによれば、「ハッタは、1942年から1945年の軍政期の演説において相互扶助について言及したが、決して「ゴトン・ロヨン」は使わず、トロン・ムノロンを使っていた。ハッタの演説集で初めて「ゴトン・ロヨン」が使われるのは、1946年1月23日のラジオ演説においてである」という[Bowen 1986,549]。しかし軍政期にハッタが、相互扶助の意味では「ゴトン・ロヨン」を使わなかったとしても、「ゴトン・ロヨン」という用語自体を使わなかったわけではない。

1945年7月15日の第2回独立準備調査会の本会議において憲法問題が討議された際、スカルノの発言の後、ハッタは特に議長に発言を求め、その中で次のように「ゴトン・ロヨン」を使用している。

「憲法策定小委員会の主査〔スカルノ〕によって述べられたことについて、私は基本的に賛成する。確かに我々は個人主義と対決しなければならないし、私自身、個人主義と対決するために20年以上戦ってきたといってもよい。我々は、ゴトン・ロヨンの基本と協同活動 (usaha bersama) の成果の上に新しい国家を樹立する。しかし、もし憲法の中に、発言する権利を与えろという、国民に対する信念 (keyakinan) あるいは保証がないなら、私はひとつのことが気にかかる。すなわち、我々が現在作っている憲法上で、恐らく後に、我々が賛成しない国家を創造することになることである。(中略) しながら我々は、新しい国家を樹立しなければ

ならない。我々が創造する国家が、権力国家 (negara kekuasaan) にならないようにする条件に、我々は気を配りたい。我々は世話役国家 (negara pengurus) を望む。我々は、ゴトン・ロヨンと協同活動に基づく新しい社会を建設する。我々の目的は社会を新しくすることである」[Yamin 1959,299]。さらにハッタは次のように述べている。

「集産主義 (collectivisme) ^(注27) においては、集産主義の構成員、家族構成員にとって、その集産主義の機関をできるだけ良好に設置したり、運営するための意見を出すという、わずかばかりの権利がある。私の提案は、まさしく我々が創造する国家が、世話役国家となるように、この世話役国家が後に権力国家、弾圧国家とならないように守っていくということだけである。我々がいう基本とは、ゴトン・ロヨンと協同活動という基本である。端的に言えば、集産主義という基本である」[Yamin 1959,300]。この文脈でのハッタの「ゴトン・ロヨン」概念は、助け合いというよりも集産主義、集団主義、あるいは協同活動に関連する概念の意味合いが強い。

一方スポモは、1945年5月31日の第1回独立準備調査会における演説で、以下のように「ゴトン・ロヨン」を使用している。「国民各階層間、国民とその指導者間の一体的な雰囲気の中で、すべての階層が、ゴトン・ロヨンの精神、家族主義の精神によってつつまれている」[Yamin 1959,113]。

次に、スカルノの独立記念日演説（独立宣言以降、毎年8月17日に行われた大統領演説）を中心として、そこで使用された「ゴトン・ロヨン」について取り上げる。スカルノの独立記念日演説に注目すると、「ゴトン・ロヨン」が使

用されるのは、1945年の「パンチャシラの誕生」演説から5年経過した50年の独立記念日演説においてである。

「公正な社会は、質の高い広範な農業、高効率の工場、完全な水準に達した輸送と交通、識字力のある国民、技術と電力、治安と平穏、全国民大衆に力を与える ^(注28) ゴトン・ロヨンの精神を要求する。そしてこれらは皆、出来上がったものが天空から降ってくることはなく、1人2人の人ではなく、我々全員によって、すべての人々によって行われ、作られ、具現化され、創造されなければならない」[Soekarno 1965, 112]。

インドネシアは1949年のハーグ円卓会議でオランダとの独立戦争に終止符をうったが、その意味で50年は、インドネシアが本格的に国家建設に邁進し始める年であり、この演説でも平等な分配だけでなく、生産の重要性が強調されており、国家建設の意気込みが窺える。ここではゴトン・ロヨンの精神が、国家建設に要求されるもののひとつであることが示されている。

この時期までのスカルノの「ゴトン・ロヨン」の使用を見ると、日本軍政期に打ち出された村落の伝統への言及はなく、また伝統性の強調は見られない。この時期のスカルノの「ゴトン・ロヨン」概念は、土屋がいうところの「民族の魂」ゴトン・ロヨンをスカルノ自身が生み出し、鍛え上げていった過程にあったと見ることができる。そして、この「ゴトン・ロヨン」概念に、スカルノは国家編成原理の基盤としての理念の位置づけを与えていたといえよう。

2. ナサコム (NASAKOM) ^(注29) 体制の編成原理としての「ゴトン・ロヨン」概念

1950年の独立記念日演説の後、スカルノによ

って「ゴトン・ロヨン」が独立記念日演説で使われるのは、52年である。「自立したインドネシア経済（鉱産物，農産物，天然資源，人的資源の分野でインドネシアはとても豊かであることを思い出せ），自立したインドネシア経済，その望みは高すぎるのか？社会性のある生活，家族主義の生活，繁栄し公正な生活，貧困や極度に劣悪ではない生活（インドネシアは以前ゴトン・ロヨンの宝庫であったし，インドネシアは“あふれんばかりの肥沃さの繁栄”とかつていわれたことがあったことを思い出せ），その望みは途方もなく高い望みなのか？」[Soekarno 1965,166]と述べている。

スカルノはゴトン・ロヨンについて，以前は，インドネシアはその宝庫であったと指摘している。つまり，スカルノの用いる「ゴトン・ロヨン」概念は，ここで伝統的性格を帯びたものとなる。しかし，社会性のある生活，家族主義の生活，繁栄し公正な生活，貧困や極度に劣悪ではない生活，そういった生活の達成のために，ゴトン・ロヨンは役割を果たすものだ，と捉えている点では，従来の主張と変わってはいない。

翌1953年の独立記念日演説で，スカルノは「ゴトン・ロヨン」を2カ所で使用している。

「しかし全般的にジョクジャ時代^(注30)はまだ光り輝いていた，と私は先ほど述べた。私はその要因についても先ほど述べた。つまり，国外に由来するマイナス要因はオランダの経済的攻撃，政治的攻撃，軍事的攻撃である。国内に由来するプラス要因もある。すなわち，団結の足跡，インドネシア精神の中に深く根を張ったゴトン・ロヨンの足跡，そしてパンチャシラ原則に由来する統一力も加えられる」[Soekarno 1965,175]。

「一般的にいわれる民主主義の原則における普遍的な要素以外に，インドネシアの民主主義は，なお特別な要素，インドネシア民族自身の政治リズムと精神（jiwa）に基づく特別な要素を発見しなければならない。

その特別な要素は存在するのか？存在する！例を挙げれば，ゴトン・ロヨンというインドネシア固有の要素や家族主義の雰囲気におけるムシャワラー^(注31)の要素である。これらの要素は西洋の諸民族にはない。これらの要素は何世紀にもわたって伝えられてきたインドネシア民族の精神的伝統（tradisi jiwa）の遺産，加えてヒンドゥー以前，イスラム以前のインドネシア伝統の遺産である。“半数プラス1が正しい”という基準を用いる西洋の民主主義の実施方法は，ゴトン・ロヨンの精神や統合の精神と同じリズムではなく，論争，反対を引き起こす精神，対立を引き起こす精神である」[Soekarno 1965, 182-183]。

ここでスカルノは，「ゴトン・ロヨン」概念をインドネシアの伝統の遺産とし，その伝統性を強調している。さらに「ゴトン・ロヨン」概念は，スカルノの持論である，西洋の一般の民主主義とは異なるインドネシア民主主義^(注32)の特別な要素の一例として位置づけられており，指導される民主主義の提案につながるスカルノの問題意識が窺える。しかし，ここでは，ゴトン・ロヨンというインドネシア固有の要素，ゴトン・ロヨンの精神という表現がなされているものの，その概念が何であるかについて明確に述べられてはいない。

1955年にインドネシア初の総選挙が行われ，議会は過半数を制する政党が存在しない複数政党分立状態となった。また，このときの2年間

にわたる選挙戦は、村レベルにまで政党対立を持ち込み、村の伝統、統一、村長の権威を大いにゆるがせたとされている [木村 1989,53]。さらに軍の合理化問題に端を発した軍の政治関与による混乱も各地で相次ぐ。1956年になると、地方の不満が陸軍を巻き込んだ形で現われる。このような情勢下で1957年3月14日スカルノは全土に戒厳令を施行した。

1954年から56年の独立記念日演説には、「ゴトン・ロヨン」は用いられていない。なお木村によれば、この間、「スカルノは、総選挙を総括した56年3月の演説で、50%プラス1が常に正しいという西欧民主主義の多数決原則を排し、ムシャワラーとゴトン・ロヨンに基づく民主主義に替えるべきであると説いていた」 [木村 1989,56] という。

1957年の独立記念日演説において、スカルノは「ゴトン・ロヨン」を用いているが、これに先立ち、57年2月の政治構想演説で、「ゴトン・ロヨン」が用いられ、ゴトン・ロヨン内閣の提唱が行われている。

「内閣についてはどうか？それに関しては、諸君、ゴトン・ロヨン内閣^(註33)を作ろう。私はその言葉ゴトン・ロヨンを特別に用いる。なぜならば、この言葉は我々に最も純粋なインドネシア精神像を伝える真正なインドネシア語であるからだ」 [Feith and Castles 1970,85]。ここでもスカルノは「ゴトン・ロヨン」を真正なインドネシア語といている。

「私が諸君のために示す原理は、家族主義の原理、ゴトン・ロヨンの原理である。もしこの原理が実行されれば、反対党はなくなるだろう。協議つまりムシャワラーは、家族主義の原理と密接な関係があり、ゴトン・ロヨンの雰囲気の中

中で機能するだろう」 [Feith and Castles 1970,86], 「同志よ、あらゆる仲間割れを克服しよう。もう一度いう、私はどちらの側にもつかない。私は、インドネシア精神、インドネシア国民の真の精神と調和するもの、すなわち家族主義の精神を提案したい。それゆえ、私はこの内閣をゴトン・ロヨン内閣と呼ぶ」 [Feith and Castles 1970,88]。

1957年の独立記念日演説において、スカルノは次のように述べている。

「我々の精神の弱点とは何か？我々の精神の弱点とは、我々自身への民族としての信頼不足である。その結果、我々は本来、ゴトン・ロヨンの国民 (rakyat) であったにもかかわらず、互いに信頼不足で外国の物まねをする民族となってしまった。頑強な精神を持たずに、すぐに楽しいことや“安易な方法”を求める民族となってしまった」 [Soekarno 1965,284], 「われわれが用いなければならない〔政治システム〕は『けんか騒ぎの自由主義』ではなく、その中に、ひとつの目的すなわち社会的公正を目指す仕組みをもつ民主主義である。規律をもった民主主義、インドネシア民族の生活基盤すなわちゴトン・ロヨンに適合した民主主義、ひとつの目的に対して自己の欲求を抑える民主主義、リーダーシップのある民主主義、指導される民主主義である」 [Soekarno 1965,291], 「この12年間、我々を公正で繁栄した社会という理想、ゴトン・ロヨンの経済社会という理想の実現の方向に向かわせることができずに、逆に依然としてまだ、わが国民を自由主義経済という搾取の中にとどめておくものは何か」 [Soekarno 1965,292], 「〔政治〕体制を見直し、わが民族の特性に一層適合した〔政治〕体制、つまりわが民族のゴトン・

ロヨンに一層適合した〔政治〕体制に転換する。公正な社会という唯一の目的に向けての指導性あるいは運営手段を与える〔政治〕体制に転換する。勝手放題でない民主主義をわが民族に与えよ。足を引っ掛けて転ばせることのないゴトン・ロヨン民主主義をわが民族に与えよ。社会的公正の方向を目指すリーダーシップを持つ民主主義をわが民族に与えよ。指導される民主主義をわが民族に与えよ」[Soekarno 1965,293], 「汚職の撲滅は、もし上部階級の簡素化の運動、ゴトン・ロヨン運動、多くの国民階層の社会正義が伴わないなら十分でないだろう」[Soekarno 1965,300]。

さらにスカルノは、この日の演説で新生活運動を提唱し、その活動として7項目を挙げ、その4番目に「ゴトン・ロヨンを復興し(membangkitkan)、発展させること」[Soekarno 1965,309]が入っている^(注34)。

これらの「ゴトン・ロヨン」の用いられ方を見ると、「我々は本来、ゴトン・ロヨンの国民であったにもかかわらず」といった表現には、ゴトン・ロヨンの伝統性の強調が見られる。1945年の「パンチャシラの誕生」演説当時は、統一インドネシアの中核的概念として位置づけることができたスカルノの「ゴトン・ロヨン」の概念は、この時点ではその位置づけに変化を見せ、伝統を強調した上での、議会制民主主義に代わる指導される民主主義の礎を導くものとしての概念に変化しつつある。

翌年の1958年の独立記念日演説では、スカルノによって「ゴトン・ロヨン」が使用されることはなかった。1959年7月に45年憲法への復帰宣言が行われた。その翌月、「われらが革命の再発見」と題された独立記念日演説において

「ゴトン・ロヨン」が使用されている。

「インドネシア民族の社会意識を具体化したものは何か？具体化したものは、統合、ゴトン・ロヨン、私が“えんやこら〔の掛け声〕”の精神と名づけた精神である。統合の精神、ゴトン・ロヨンの精神，“えんやこら〔の掛け声〕”の精神は、公正で繁栄した社会を実現していくための絶対条件である。(中略)自由主義が我々の社会意識に毒を入れ、個人主義が我々の統合、ゴトン・ロヨンのなあり方(kegotongroyongan), “えんやこら〔の掛け声〕”のなあり方”(keholopi-skuntulbarisan)の結合力をひび割れさせ、引き裂いた。(中略)個人主義、それは社会的公正思想の最大の敵であるが、インドネシア民族、以前からゴトン・ロヨンの民族として知られてきたインドネシア民族、革命の中で一致団結してゴトン・ロヨンを行う民族としての姿勢を貫いていたインドネシア民族、その心の中に〔個人主義が〕潜入した」[Soekarno 1965,373]。

「国家と社会のあらゆる業務のために、国民の援助(bantuan)を絶対的に必要とするという原理と、ゴトン・ロヨンを核に持つインドネシア民族の特性という現実的な性格に基づき、大統領は暫定最高諮問会議(Dewan Pertimbangan Agung Sementara)を設置した。国民の援助とゴトン・ロヨンは、暫定最高諮問会議の議員編成において大統領によってでき得る限り取り入れられた。(中略)14年以上前、日本統治時代、すなわち独立宣言以前、『パンチャシラの誕生』演説において、すでに私はインドネシア民族の特性はゴトン・ロヨンであることを言明した。パンチャシラはインドネシア国民の特性の生まれ変わりである。そしてもしパンチャ

シラを圧縮するなら、(中略)ひとつの原則すなわちゴトン・ロヨンになる。ゴトン・ロヨンは家族主義のように静的なものではなく、ゴトン・ロヨンは動的なもの、ゴトン・ロヨンは腰布を腰にたくし上げての仕事、ゴトン・ロヨンは“えんやこら〔の掛け声〕”である」[Soekarno 1965,383-384]。

ここでスカルノは、「ゴトン・ロヨン」は、「腰布を腰にたくし上げての仕事、ゴトン・ロヨンはえんやこら〔の掛け声〕である」と述べた。また、この年の演説から「ゴトン・ロヨン」に加え、用語クゴトンロヨンガン(以下「クゴトンロヨンガン」と表記する)が使用されるようになった。「クゴトンロヨンガン」は、「ゴトン・ロヨン」を抽象名詞化したものであり、意味はゴトン・ロヨンのあり方、ゴトン・ロヨン性である。「ゴトン・ロヨン」概念が拡張され、その補強が図られる端緒となったといえる。

1955年の総選挙で選出された議員からなる議会において、1960年3月の政府予算案が否決されたことに対抗して、スカルノは国民議会を解散させた。そして同年6月大統領が任命する政党代表、職能代表からなる議員を任命し、これらの議員からなる議会をゴトン・ロヨン国会と名づけた。

1960年の独立記念日演説では、「ゴトン・ロヨン」がかなり頻繁に用いられている。まず、国会の再編でゴトン・ロヨン国会が設置されたこと[Soekarno 1965,410]に言及している。さらに「ゴトン・ロヨン」について、その意味をよりはっきりさせる[Soekarno 1965,412]と述べ、説明を加えている。

「ゴトン・ロヨンの精神は、インドネシアの

特性のひとつであることは、すでにあちこちで[有名になり]、外国でも有名になった。このインドネシアのように、ゴトン・ロヨンが村落の生活実態(kenyataan hidup di desa-desa)、ひとつの生活実態(living reality)である国は、この大空の下にひとつもない。宗教生活においてインドネシア民族のように寛容な民族はひとつもない。しかしまた、インドネシア民族のように政治面においてこのゴトン・ロヨンの原理にときどき反する民族もひとつもない。

1945年11月3日の政府布告^(注35)のよくないことのひとつは、ゴトン・ロヨンの精神に反していることである。(中略)ゴトン・ロヨンは単にインドネシアの特性であるだけではない!ゴトン・ロヨンは“インドネシアのアイデンティティ”の性格を持つだけではない。ゴトン・ロヨンはまた、過去においても現在においても帝国主義と資本主義に対する闘争におけるひとつの必要物でもある。あらゆる革命勢力を結集させることなく、帝国主義と資本主義を破壊する闘争に勝利できるなどは望むな!

そして我々は一体勝利したいのか?そして我々は一体勝利しなければならないのか?勝利しなければならないからこそ、政治分野においても私はゴトン・ロヨンをいつも前面に押し出している。それゆえに、政治宣言(Manifest Politik)^(注36)とウスデック(USDEK)^(注37)は、政治分野において完全なゴトン・ロヨン性の精神を持っている。そうであるがゆえに、私は数週間前ソロで、イスラム集団と民族派と共産党間の統合とゴトン・ロヨン性の必要性を表明してきた。これはウスデックと政治宣言の全支持者にとって最重要の政治決着であり、1945年8月の革命に忠実な人たち全員にとって、単刀直

入な政治決着である。

もしそうでないなら、ゴトン・ロヨン、政治宣言、ウスデック、国民戦線、“革命への忠実さ”などについてのあらゆる話は、まったくの意味のない話、まったくのリップサービスに過ぎなくなる。(中略) 反帝国主義、反資本主義闘争には、ゴトン・ロヨン、統合、結集が必要であることに真に気づいているなら、我々はイスラム集団、民族主義者集団、共産主義者集団の統合を実現しなければならない」[Soekarno 1965,413-414]。

この演説でスカルノは、「ゴトン・ロヨン」の認知が国際的にも広まったという認識を示した上で、ゴトン・ロヨン精神の政治的活用を唱えた。「あらゆる革命勢力を結集させることなく、帝国主義と資本主義を破壊する闘争に勝利できるなどとは望むな！」と述べ、国際的な認知を意識したせいか、革命勢力という言葉を使用した。さらに「ゴトン・ロヨン」を従来の主張である、自由主義、個人主義への対抗理念としてだけではなく、帝国主義、資本主義への対抗理念としても持ち出した。ついでスカルノは、独立後西洋の民主主義を受け入れてきた結果、政治面でのイスラム集団、民族主義者、共産党間の衝突が生じ、国内政治の混乱を招いたという状況把握を行った。これに基づき、イスラム集団、民族主義者、共産党を結びつけるナサコム体制の編成原理として、インドネシア民族の特性であるとしてきたゴトン・ロヨン精神を位置づけた。また、このとき、スカルノが「ゴトン・ロヨン」を使い始めてから、彼が村落の生活実態と「ゴトン・ロヨン」を関連づけたのは、これまで見てきた資料において、このときが初めてである点が注目される。つまり「ゴトン・

ロヨン」における村落の強調が現われたと見ることができる。

このあと、スカルノはすでに設置された、国民会議 (Dewan Nasional)、最高諮問会議、国家企画会議においては、イスラム集団、民族主義者集団、共産主義者集団の代表が中心となっており、これらが順調に機能していることを述べた後、次のようにいっている。

「ゴトン・ロヨン国会 (D.P.R.G.R.) において、私はこの三集団から代表を集める。そして私のゴトン・ロヨン国会はうまく機能するだろう。(中略) そして私は国民協議会がうまく機能することを確信している。これはすべて、信仰を持つ者、民族主義者、共産主義者といった集団間、民衆の受難という痛みに燃え上がった、しかしまた、民衆受難のメッセージ (Amanat Penderitaan Rakyat) [のスローガン] を実行したいという理想主義の火によって燃え上がった者すべての集団間における公平なゴトン・ロヨン性の実践といえるのではないのか？ (中略) 国民は皆、[帝国主義者に対する] 偉大な闘争においてゴトン・ロヨン性を持たなければならない！」[Soekarno 1965,415]。

ここでは、政治面での三集団統合の手段としてのゴトン・ロヨン性にとどまらず、さらに帝国主義者に対する闘争において、国民全体にゴトン・ロヨン性を持つよう促す主張を述べている。この主張に引き続き、スカルノは「資本と労働力の統合、すなわちゴトン・ロヨン化 (penggotong-royongan)」[Soekarno 1965,416] と述べている。

前年の1959年の独立記念日演説に比べ、「ゴトン・ロヨン」の概念が、帝国主義に対する闘争手段、ナサコム体制の編成原理として、一層

拡張して展開されている。

1961年の独立記念日演説でも、スカルノは「指導される民主主義」との関連で「ゴトン・ロヨン」概念を取り上げ、その関係の強化を図っている。「ならず者の民主主義でない民主主義をわが民族に与えよ！足を引っ掛けて転ばせることのないゴトン・ロヨン民主主義をわが民族に与えよ！社会的に公正な“指導力を持った”民主主義をわが民族に与えよ！なぜなら、集団や個人に何千もの目的を放置する民主主義は、国家の財産を災難の流れに沈めるだろうから」[Soekarno 1965,449]。ゴトン・ロヨン民主主義とは、指導者に指導される民主主義であることが明確に述べられている。

さらに以下に見るようにスカルノは、ゴトン・ロヨン精神を政治機構統制の基盤に据えている。「我々は、ゴトン・ロヨン国会における成長を見る。我々は、暫定国民協議会における成長を見る。我々は、最高諮問会議におけるムシャワラーシステムの適切さを見る。我々は、国家企画会議の非常に価値ある成果を見る。これが政治部門における、ゴトン・ロヨン精神、ムシャワラー、ムファカット^(注38)に基づく組織的な新しい統制である」[Soekarno 1965,463]。「それ〔革命主義者の統合〕をつぶすことは、革命の敵のためになるからだ。統合のために活動せよ、なぜなら統合を通じてのみ、ゴトン・ロヨンのあり方を通じてのみ、えんやこら〔の掛け声〕的なあり方を通じてのみ、祖国、国民、革命は安泰となることができる。パンチャシラ^(注39)は統合の手段である！」[Soekarno 1965,469]。

1962年の独立記念日演説でも、「ゴトン・ロ

ヨン」が数カ所で使用されている。

「政府の三大プログラムは、すさまじい闘争と粉骨碎身に、もうひとつのことを加えて初めて遂行できる。その加えられるものとは何か？それは国民的基盤である。それは国民精神の方向づけである。政府の三大プログラムは、もしすべての力、すべての物質的力、精神的力、すべての資金と勢力が一斉に、ゴトン・ロヨンの、えんやこら〔の掛け声〕的に方向づけられるならば、定められた期間で実行できる」[Soekarno 1965,492]。ここでは、実行内閣(Kabinet Kerja)の三大プログラムである、衣料・食糧の充足、治安の確保、西イリアン奪回といった目標実現のための国民精神の方向づけに、ゴトン・ロヨン精神が必要だとされている。

さらに「ゴトン・ロヨン」概念をめぐるインドネシアの特性について、以下に見るように、スカルノ自身が独立記念日演説で教えを行ってきたという認識を示している。

「1959年以降の独立記念日演説はみな、最初のページから最後のページまで教え(wejangsan)を含んでいるといってもよい。革命についての教え、パンチャシラや進歩主義についての教え、ゴトン・ロヨン、ムシャワラー、ムファカットをめぐるインドネシアの特性についての教え、革命的国民の統合についての教え、共産主義者恐怖症を一掃する教え、ナサコム軸を絶対的に必要とする教え、自由主義の悪についての教え、ひとつの国民的指導の必要性についての教え、社会主義についての教えである」[Soekarno 1965,493]。特に1959年以降、スカルノは独立記念日演説を通じて国民への「ゴトン・ロヨン」概念の普及に関与してきたことを自認しているという見方ができる。

スカルノはこの演説の終わり近くで、ゴトン・ロヨンを行い続けることが我々国民の義務であると述べた。「諸君！我々の義務は、政治宣言、ウスデックと RESOPIM^(注40)を強く握りしめながら、ひとつに融合し続けることであり、ゴトン・ロヨンを行い (bergotongroyong) 続けることである」[Soekarno 1965,515]。

行い続けなければいけない義務であるゴトン・ロヨンとは、何を示しているのか。パンチャシラをひとつに圧縮した「ゴトン・ロヨン」の概念なのか。スカルノ後のオルデバルー期（スハルト期）に政策的に取り上げられ、推進されたと見られる労働奉仕としての「ゴトン・ロヨン」の概念なのか。行い続けなければいけない義務、つまり行動面の強調と解釈すれば、このゴトン・ロヨンを行う (bergotongroyong) は、労働奉仕としての「ゴトン・ロヨン」の概念につながる可能性がある。

1963年5月西イリアンの施政権が国連からインドネシア政府に委譲された。前年の独立記念日演説で触れられた三大プログラムのひとつ、西イリアン奪回は解決を見た。この1963年と64年の独立記念日演説では、「ゴトン・ロヨン」はほとんど用いられておらず、各々1回ずつである。

1963年の演説では、経済問題解決を考える際の前提条件を6項目挙げている。そのうちの4番目でゴトン・ロヨンについて触れている。「4つ、インドネシア国民はゴトン・ロヨンの精神を持っている。そしてこれは、あらゆる富と力を集合させるための基盤として用いられる」[Soekarno 1965,541]。

1964年の演説では、「ロマンティック、動的、弁証法的、前進的、解放、ゴトン・ロヨン性、

ナサコム性といった、私が革命の要素と名づけたものは皆、国民の中に息づかねばならない、国民の心の中に燃え立たなければならない、国民の頭の中で鳴り響かなければならない、国民全体に衝撃を与えなければならない」[Soekarno 1965,592] と述べ、ゴトン・ロヨンは革命の要素であり、国民の心中で燃え盛らなければならないとしている。

これまで見てきた資料によれば、スカルノの「ゴトン・ロヨン」概念における伝統性の強調は、1952年の独立記念日演説から始まる。これに伴い、「指導される民主主義」期に向けて、スカルノは議会の円滑運営の方策のための理念、すなわちなサコム体制の編成原理として「ゴトン・ロヨン」概念を位置づけるようになった。

IV クンチョロニングラットによる「ゴトン・ロヨン」概念の精緻化

スカルノによるパンチャシラ誕生の演説の8年後、1953年にスタルジョ・カルトハディクスモ (Sutardjo Kartohadikoesoemo) により『デサ論』の初版が出版された。増田によれば、この時期は、「1950年憲法による議院内閣制に安定がなく、西欧型民主主義による独立共和国の前途が危惧されていた」[増田 1971,376] 時期である。『デサ論』は、この時代風潮を踏まえ、スカルノが唱えたパンチャシラにおける「ゴトン・ロヨン」概念をインドネシア村落（デサ）のエトスとして位置づけたものである^(注41)。

この時期に前後してインドネシア人によって村落実態調査が行われており、その調査要領や調査報告書に「ゴトン・ロヨン」が散見される。しかし、この1950年代半ばまでの村落実態調査

では、「ゴトン・ロヨン」が村落のどのような活動に対応するかが具体的に体系だって示されていない^(注42)。「ゴトン・ロヨン」が村落のどのような活動にあたるかについて、現地のさまざまな活動名称との具体的な対応づけを行い、これに基づき類型化し、村落活動としての「ゴトン・ロヨン」概念を確定させる村落実態調査を行ったのは、クンチョロニングラットである。

先に述べたようにクンチョロニングラットは、「現実的な視点から理解される、実社会におけるゴトン・ロヨンおよびその原理を知ることでも我々インドネシア人には必要である」[Koentjaraningrat 1961.2] という問題意識の下に、スカルノの指導される民主主義期のさなかである1958年と59年に中部ジャワ州クブメン(Kebumen)県の2村落、チュラパル(Celapar)とワジャサリ(Wajasari)で相互扶助慣行についてのゴトン・ロヨン慣行調査を行った。この調査結果をまとめ、分析を加えたものが、1961年に発表された『中部ジャワの2村落におけるゴトン・ロヨン慣行の社会人類学的観察』である。

村落における相互扶助の概念に該当する慣行は、この調査で101事例発見され、これらは以下の7類型に分類された^(注43)[Koentjaraningrat 1961.37-43] (詳しくは後述するが、この類型は村落の相互扶助慣行の類型であり、「ゴトン・ロヨン」として言及された行動の類型ではない)。

(1)村民の家族に死者が出たり、災難に見舞われた時に行われる活動で tetulung (援助), tulung layat (葬儀の援助) と呼ばれるもの。

(2)公共上必要だと考えられる作業がある時に、村をあげて行われる活動で gugur gunung (字義は山崩れ) と呼ばれる。全村民参加の35日ご

とに行われる集会で提案される。川の堰の修理やモスクの建築改装などがあり、交替制で行われ、食事は各自が持参する。

(3)村民が祝宴を実施する時に行われる活動で jurung (手助け) と呼ばれるもの。sambatan (助力要請), guyuban (親善交際) という言葉もときどき用いられる。これは、結婚、割礼などの儀式が対象で、食材の提供や祝宴の周辺労働などで助力が行われる。

(4)祖先の墓の世話や清掃などで行われる活動で rerukunan alur waris (一族の連携) と呼ばれるもの。

(5)村の住民の家屋に関して、作業をする必要があるときに行われる活動で sambat-sinambat (相互の助力要請), sambatan と呼ばれる。わずかながら guyuban と呼ばれることもある。屋根や竹壁の修理、ねずみの侵入の排除、庭の井戸掘り等がある。屋根の葺き替え等では、定められた儀礼的な手続きがとられる。

(6)農作業において生産を高めるために行われる活動、仕組みで grojogan (付加労働力による刈り取り作業), krubutan (集団行動), gentosan (交替制) と呼ばれる。sambatan, guyuban と呼ばれることもある。

(7)共同体の便益のために労力を提供する活動で kerigan (規則正しく組織的に必要な作業を行うこと), kuduran (義務的性格を持つ助力) と呼ばれ、村の道路や用水路の清掃、橋の修理といった日常的な補修活動を行うもの。村長の個人的な便宜のための労働は、kuduran と呼ばれ、この2村では年2回行われた。第2次世界大戦以前は、kerigan, kuduran は土地所有者の労働義務であった [Koentjaraningrat 1961.29-37]。

本調査を行った背景として、先に述べたもの

以外にクンチョロニングラットは次のように述べている。「一般大衆によって使われるこの言葉〔ゴトン・ロヨン〕の意味は、共同体の構成員間の協力である。普通、この意味は、参加者の自発的態度から生じた協力、公共の利益に貢献したいという欲求から生じた協力といった観念論を内包することによってさらに精巧に作り上げられる。さらにこの概念の提案者^(注44)は、大衆向け宣伝用印刷物において、自発性と公共の利益に貢献したいという欲求が、インドネシアの村落住民の国民的特性であるという印象を作り出す」[Koentjaraningrat 1961,2]。

クンチョロニングラットは、「一般大衆によって使われるこの言葉の意味は、共同体の構成員間の協力である」といっているが、1974年にクンチョロニングラットによって書かれた『文化、心性、開発』においては、彼がこの調査を行ったとき、ゴトン・ロヨンという用語は、1955年総選挙キャンペーンの時期にこの調査地に持ち込まれ、この〔調査〕当時、同地の農民に知られ始めたばかりであったと述べている[Koentjaraningrat 1974,62]。従って、この意味の解釈は、農民達の解釈ではなくクンチョロニングラット自身の解釈であるといえよう。

注目すべきは、この調査では、農村の相互扶助慣行、慣習にはどのような種類があり、どのような言葉で言い表わされているかが調べられたということであり、ゴトン・ロヨンという用語とこれらの慣習、慣行が、農民の認識において合致していたのではなかったということである。つまり、農民に「ゴトン・ロヨン」とはどのような慣習、慣行なのかを尋ね、その結果を取りまとめたのではなく、相互扶助慣行と思われる用語を農民から集めて7類型に分類し、こ

れら7類型を総合して「ゴトン・ロヨン」の概念であるとクンチョロニングラットが定めたのである。

この調査以降、クンチョロニングラットの7類型を基礎とした農村の相互扶助慣行としての「ゴトン・ロヨン」概念が定着していく。これが、スハルト期の開発政策における、「ゴトン・ロヨン」概念を利用した労働奉仕の推進等を経て、現在の「ゴトン・ロヨン」概念の形成につながっていくことになる^(注45)。

おわりに

「ゴトン・ロヨン」は、1901年刊行のジャワ語オランダ語辞典には掲載されておらず、38年刊行のジャワ語オランダ語辞典、39年刊行のジャワ語辞典に掲載されている。このことから、この用語は1900年代初頭から30年代までの間にジャワ語の辞典編纂者によって収集されたものと考えられる。意味は、「力を合わせて」、「共同負担で」あるいは「大勢で一緒にものを運ぶ」である。辞典へのこの掲載時点から判断すると、「ゴトン・ロヨン」の起源は、20世紀初頭にあると見ることができる。あるいは、それ以前から「ゴトン・ロヨン」が使用されていたとしても、ジャワ島の比較的狭い地域で、さほど多くない人々によって使用されていた用語であったとするのが妥当であろう。

日本軍政期の1944年、インドネシア語整備委員会では「ゴトン・ロヨン」は、インドネシア語の新語として助け合いの意味で承認された。この時期「ゴトン・ロヨン」は、軍政当局により住民間の助け合いという概念で捉えられ、伝統的な奉公精神を示すものとして喧伝された。し

かし、この当時のラジマン発言における、「助け合い〔の性格〕と純粋なゴトン・ロヨンの性格」を区別した表現、ハッタによる1942年から45年までの演説での相互扶助の言及が「ゴトン・ロヨン」ではなくトロン・ムノロンであったというボーウェンの指摘、またスカルノによる45年7月の「もし我々が、真に我々の国家を家族主義の観念、助け合い（tolong-menolong）の観念、ゴトン・ロヨンと社会的公正の観念に基づかせたいなら」という発言での「ゴトン・ロヨン」がトロン・ムノロンと並列して用いられた点から判断すると、彼らは「ゴトン・ロヨン」を助け合いとして捉えていたとするよりも、協同もしくは協同活動として捉えていたとする見方が成立すると思われる。端的に言えば「ゴトン・ロヨン」を助け合いという概念で捉えたのは日本軍政当局側であり、インドネシア人側は協同という概念で捉えていたのではないかということである。

1945年のパンチャシラ誕生演説でスカルノの「ゴトン・ロヨン」の概念が提示される。それは、異なる宗教、異なる民族、異なる人種、異なる階級に属する民衆間における、公益、公正に基づく目的を達成するための協同を通じて醸成される一体感であるといえよう。そしてスカルノはこの概念を、その後1960年代まで用い続ける。この間、スカルノが用いた「ゴトン・ロヨン」概念は、助け合い（相互扶助）というよりは、協同精神の概念として捉える方が妥当である。

スカルノは、1945年のパンチャシラ誕生演説で「ゴトン・ロヨン」を、建国5原則を1原則に圧縮した概念として表現した。つまりこのときスカルノは、1933年の論文で人々の心に植え

付けなければならない種であるとしたとき以来温め続けた「ゴトン・ロヨン」を、新たな概念としてインドネシアの国家編成原理の基盤としての理念に位置づけたといえよう。その後、オランダから主権委譲を受けた新生インドネシアにおいてスカルノは、日本軍政当局が行ったのと同様に、「ゴトン・ロヨン」概念の伝統性を強調するようになる。さらに議会運営を円滑に図ることを主目的とし、西洋民主主義に対抗する「指導される民主主義」の理念として「ゴトン・ロヨン」概念を位置づけるようになる。換言すれば、スカルノが用いた「ゴトン・ロヨン」概念の位置づけは、国家編成原理の基盤としての理念から、指導される民主主義の礎を導く理念への移行を通じて、国内政治運営円滑化の手段すなわちなサコム体制の編成原理としての理念に、その位置づけを変化させた。そして、スカルノの「ゴトン・ロヨン」概念の由来は、自身が新しく生み出した概念から伝統的な概念に変容したということができる。

1950年代末から60年代初めにかけて、クンチョロニングラットは「ゴトン・ロヨン」がインドネシア（調査地はジャワであったが、クンチョロニングラットの意図としてはインドネシアを意識している）の村民の生活の中で実際に何を示しているかについて「共同体の構成員間の協力」という定義を措定した上で村落調査を行い、この概念の具体的な精緻化を図った。ここで「ゴトン・ロヨン」の概念は、インドネシアの村落における相互扶助慣行の総体を示すものとして、いわば体系だって提示されることになった。

このように「ゴトン・ロヨン」概念が変容を重ねていったのは、元来この用語がインドネシ

ア全域において定着し、かつ明確な実体を伴った用語ではなく、その普及に際し政治的な意図を持つ概念として性格づけられた用語であったことに由来するのである。

(注1) 内閣発足時のマスメディアの報道を管見する限り、メガワティ大統領がゴトン・ロヨンという内閣名称命名について触れたのは、8月10日の大臣任命式での記者会見においてのみである。2001年8月11日付『コンパス』紙によれば、大統領は「ゴトン・ロヨンはインドネシア民族の家族社会生活の核心であるのだから保持され続けなければならない。そのため、任命されたばかりの大臣たちにゴトン・ロヨンの真の意味を理解するようにというメッセージを与えたいのである」と語った。

(注2) スハルト期の「ゴトン・ロヨン」と開発経済政策の関連に関しては、クンチョロニングラットの研究の他、いろいろ取り上げられている。教育文化省が1980年代初めに発表したゴトン・ロヨン調査報告と開発経済政策の関連に関しては、楢沢(2003,147-153)を参照のこと。

(注3) インドネシアにおける百科事典の「ゴトン・ロヨン」の項の記述を見ると、Shadily(1980,1156-1157)では、「ゴトン・ロヨン」は、以下の5類型に大別され説明されている。(1)ジャワ農村社会の水田耕作における繁忙期の家族外からの追加的労働力動員システム、(2)近隣間での家屋関連の助け合いの小作業、(3)結婚式などにおける慣習的儀式のための親族間、近隣間の助け合い活動、(4)災害時における村民の自発的な奉仕援助活動、(5)公共の利益となるプロジェクトや政府のプロジェクトに対する無償の労働力動員。

Nugroho(1997,211-212)では、「ゴトン・ロヨン」は、助け合いの性格を持つ互酬の協力活動とされ、上記シャディリーの5類型に基づき、インドネシア各地方独自の用語が掲載されている。

また、日本における『インドネシアの事典』では、関本(1991,173)は、「ゴトン・ロヨン」は、人々の間の自発的相互扶助であるとし、上記類型の具体例を挙げた上で、この概念には政府のスローガンとしての

ものと日常生活の中で行われている私的なさまざまなものがあると指摘している。両者の関係については、スカルノ時代には政治スローガンとしての概念が強調され、スハルト時代にはこれが、より私的な概念に取って代わってきているとしている。

インドネシアの国民教育省が発行している、同国の代表的なインドネシア語大辞典『カムス・ブサル』では、「ゴトン・ロヨン」は、共同作業をする(助け合い)、と記述されている[Pusat Bahasa 2001,370]。

(注4) 日本語の相互扶助(mutual aid)の意味は、広辞苑によると「①互いに助け合うこと。互助。②クロボトキンがダーウィンの生存競争説に反対して主張した学説。生物や社会の進化は生存競争や闘争によるのではなく、自発的に助け合うことによるとする」[新村 1998,1543]である。

社会学辞典では「自覚の有無にかかわらず人と人が助け合ってゆくこと。相互扶助を正面から取り上げて論じたのはクロボトキンであった。彼は俗流進化論に対して、種が栄えるのは相互扶助によることを論証しようとした」[見田 1988,561]と捉えている。

(注5) 独立準備調査会の委員には、スカルノ、ヤミン、デワントロ、ハッタ、スディルマン、ジャヤデニングラット、スポモ、スカルジョ、スパルジョ、マンスール、イスカンダル・ディ・ナタ、マラミス等がいた。

(注6) 旧綴りは rojong。以下、人名、書名を除き、旧綴りの単語はすべて新綴りに統一して表記。

(注7) gotong, royong ともに古代ジャワ語として古代ジャワ語英語辞典に採録されている。ただし、語根のみの用例はなく、接頭辞が付加され、変化した形での用例が掲載されているに過ぎない[Zoemulder 1982 a,540;1982 b,1560]。

(注8) 土屋によると、1847年に最初の本格的なジャワ語オランダ語辞典が完成したが、この最終定本版が1901年版のジャワ語オランダ語辞典である[土屋 1984,87]。

(注9) ロヨムについては現在、スンダ語の語彙としてスンダ語辞典に掲載されている。古いものでは1913年のスンダ語オランダ語辞典に掲載されており、意味は、「張り出す、突き出す。例としては、道に張

り出した木の枝，口ひげ」[Coolsma 1913,531]。1950年のスンダ語インドネシア語辞典では，「葉のついた，だらりと垂れ下がった木の枝，あるいは，口にかぶさる口ひげ」[Satjadibrata 1950,311]とされている。両辞典に gotong royom, gotong royong は掲載されていない。

(注10)「？」は，rinoyong, rineyong の語根が，royong であろうとの編者の推定と思われる。

(注11)〔 〕は，筆者が補ったものである。

(注12)土屋が，「ジャワのみならず植民地全域にわたって19世紀以来オランダが集成してきたあらゆる分野における知識・情報の集大成」[土屋 1984,88]と評したものの。

(注13)スカルノの自伝の20歳頃に関する記述の中にゴトン・ロヨンという言葉が出てくるが，この語が当時実際に使われたかどうかは，確定できない。1965年に出版された『スカルノ自伝——シンディー・アダムスに口述——』において，スカルノは義父の逮捕[1921年8月]に際し，バンドン工科大学学長に対し，義父の家族を助けるため学業を中断しスラバヤへ戻ることを説明する。このとき「ゴトン・ロヨン」を持ち出しているが[Sukarno 1965,55]，この自伝の記述は1960年代における回想であることを考慮すると，当時「ゴトン・ロヨン」を実際に使用したかどうかは確定できない。

(注14)土屋によると，「1901年版に続くジャワ語オランダ語辞典の編纂の中心的役割を担ったのは，ピジョウ(Pigeaud)で，彼は1926年から1942年までソロとジョクジャで辞典の編纂を行っている」[土屋 1984,87]。同辞典は，このピジョウによって編纂されたものである。

(注15)日本語と併記されているインドネシア語の記述においても同様の内容が示されている。

(注16)会議での使用言語は日本語とインドネシア語である。この議事録のインドネシア語版については，作成されたかどうか定かではない[戸田 1995b, 補486-487]。

(注17)1944年初頭の隣保組織編成に関してゴトン・ロヨン精神が取り上げられていることからすると，資料として欠いている第18回会合から第28回会合の議

事録に「ゴトン・ロヨン」に関連する記述が存在する可能性は大きいと思われるが，これまでのところ当該議事録は発見されていない。

(注18)スポモは，1943年1月5日の第4回委員会議事録に添付された原住民委員報告でも同様の主旨のことを述べている[戸田 1995a,225]。

(注19)1943年8月から10月にかけて軍政当局によって行われたボゴール地域の農村実態調査の報告書の目次の項目に日本語で「共同作業(ゴトン・ロヨン)」と記述された項目がある[上野 1967, viii]。本文の内容には，ゴトン・ロヨンという用語は用いられていない。この記述に関しては，調査活動中に「ゴトン・ロヨン」が見出され，共同作業という訳をつけたのか，調査活動とは別に，同報告書の筆者が共同作業をゴトン・ロヨンと認識していたので，この項目の記述となったのかは不明である。

(注20)61編のうち1編は執筆時期不明。

(注21)土屋によれば，「[当該論文]インドネシア党の党宣言とされている」[土屋 1994,153]。

(注22)第9章中にクォーテーション・マーク付の用語は51回出現するが，そのうち頻度が最多の用語はデモクラシー(demokrasi)で，14回である。その他，品位ある国(negeri sopan)が5回，これら以外は2回未満である。

(注23)この5原則はパンチャシラである。インドネシア民族主義，国際主義ないし人道主義，全員一致の原則ないし民主主義，社会的繁栄，唯一神への信仰をさす。

(注24)社会民族主義，社会民主主義，各宗教が互いに尊重しあつての神への信仰。

(注25)Ho-lopis-kuntul-baris はジャワ語。意味は，力を合わせて物を運んだり動かしたりするときの掛け声。

(注26)『広辞苑』によれば，協同：ともに心と力をあわせ仕事をする。共同：①二人以上のものが力をあわせること②二人以上のものが同一の資格でかわること。共働：生物群集や個体群の間に見られる相互関係。協働：協力して働くこと[新村 1998,700]とされている。本稿で用いている協同の意味は，これに基づいている。

(注27) 土地，生産手段などの国家管理の意。

(注28) 全国民大衆に力を与える（menghikmati seluruh khalayak）で，スカルノが使った menghikmati には，魅惑する，呪文をかけるといった意味もある。「ゴトン・ロヨン」に対し，スカルノが込めた思いが示されているといつてよいかもしれない。

(注29) ナショナリズム Nasionalisme，宗教 Agama，コミュニズム Komunisme の頭字語。

(注30) 独立戦争期を示す。

(注31) 協議，話し合いの意。

(注32) 西洋の一般的民主主義とは異なるインドネシア民主主義について，ダームは「1930年初めからのスカルノの持論である」としている [Dahm 1969, 201]。

(注33) このときスカルノが唱えた，共産党入閣を含むゴトン・ロヨン内閣は，諸政党や陸軍の反対で実現しなかった。

(注34) 他の項目はそれぞれ以下の通り。簡素な生活，衛生・健康運動，非識字者撲滅運動，国营事業の円滑な運営，精神振興運動（Gerakan pembangunan rohani），国民の警戒心の惹起。

(注35) 11月3日の政府布告とは，シャフリル主導の中央国民委員会による，政党結成の承認についての布告。これにより政党の乱立が実現することとなる。

(注36) 「政治宣言は，1959年8月17日の独立記念日に行われた大統領演説のことで，指導民主制の綱領的演説になった」[木村 1989,68]。

(注37) ウスデックは，政治宣言を実現する上での基本政策で，1945年憲法（Undang-Undang Dasar 1945），インドネシア流社会主義（Sosialisme a la Indonesia），指導される民主主義（Demokrasi Terpimpin），指導される経済（Ekonomi Terpimpin），民族の個性（Kepribadian Nasional）をさす [木村 1989,68]。

(注38) 全員一致の合意の意。

(注39) ここでのパンチャシラについての言及は，「パンチャシラの誕生」演説の際，スカルノがパンチャシラを1原則に圧縮すればゴトン・ロヨンになると述べたことと合致している。

(注40) Revolusi Sosialisme Pimpinan Nasional の

頭字語で革命，社会主義，国民的リーダーシップというスカルノ時代のスローガン。

(注41) スタルジョは『デサ論』初版において「ゴトン・ロヨン」活動（pekerjaan）として，村長や村役場のために行われる村民の共同作業，田畑の耕作の手伝い，家屋の建設や移動の手伝い，結婚や割礼の儀礼の手伝い，葬儀の手伝いを挙げており，手伝いには物品の貸借が含まれている [Kartohadikoesoemo 1953,243-245]。なお，1965年に出版された第2版では，ゴトン・ロヨンの項を含め内容が拡充されている。

(注42) 増田（1971,290-306）によれば，1946年に共和国一般調査局長プリングディグド（Pringgodigdo）名で公刊された，調査要項と調査結果からなるジャワ8カ村の村落調査報告書では，「ゴトン・ロヨン」は以下のように用いられている。質問表中の租税についての質問の7つのカテゴリーのひとつで「村民のあいだに残っている『相互扶助^{ゴトン・ロヨン}』の形態についてのべよ」。ポンドカソ・トンゴ（Pondokaso-Tonggoh）村の調査結果中の5つの小作方法のひとつとして「ゴトン・ロヨン。これは親戚の間で行われている。2.25ヘクタールの水田をもっているハジ・アブドゥル・ラーマンの例を見ると，彼の水田ではたらいて生活しているのは，彼の子供や兄弟など5家族25名である」。「ゴトン・ロヨン」というものがあつた。それは，移転，新築，改築などにあたって行われる村民のあいだの相互扶助の伝統的な慣行である。報酬は仕事頭にだけ与えられ，ほかのものは労務を提供するだけである」となっている。

また，土屋（1969,74-93）によれば，インドネシア大学経済社会研究所が1958年に行ったジャワ23カ村，スマトラ14カ村の農村調査における中部ジャワのルジョサリ村の報告（この農村調査の報告は大多数が公刊されていない）で「ゴトン・ロヨン」は以下のように用いられている。まえがきの項で「家は相互扶助^{ゴトン・ロヨン}作業で建てられる」。社会状態の項で「相互扶助^{ゴトン・ロヨン}は，種々の形式で行われている。1. おいおい事（結婚式，割礼など）のある場合 2. 村警 3. 農業労働 4. 家屋建築 5. 村落労働——道路，水道，橋の改修など」。村財政の項における村の収入の種類として「1 デサ地（中略）B地 住民所有地。しかし無税で供

せられる。この土地はゴトン・ロヨンで耕作せられるが、当然その土地はやせ地であって、めったに用いられることはない、「デサ成員の義務であるデサの活動は道具であれ労働力であれ、ゴトン・ロヨンによって行われている」。税の項で「住民一般は、デサに対して、墓および礼拝堂の清掃、警備巡回のようなゴトン・ロヨンの労働以外に税を課せられてはいない」。農業の項に水田農業で「梨や水牛を持っている農民はその水田で、各個人、または、ゴトン・ロヨンで働くことができる。ゴトン・ロヨンが水田で行われる方法は、労働力だけでもよく、労働力と、梨鋤、水牛などの農具による奉仕でもよい。ゴトン・ロヨン（労働奉仕）に対する報酬は、金銭ではなくて、食事、飲み物、紙巻タバコなどの提供である。水田作業がゴトン・ロヨンで行われない場合には、農民は、その水田で労働する人間を半日（朝七時から十時まで）五ルピアでやとう。もみまきも、ゴトン・ロヨンで行われる」となっている。

この調査の調査要項は、1955年に作成されており、調査票 A 一般状況の14項 A. 村役人の指導に関わる開発事業に「ゴトン・ロヨンの方法で、あるいはゴトン・ロヨンの方法でなく行われたもの」という記述がある。また、15項ゴトン・ロヨンに「A. 種類 1. 住民間の助け合い（何についてか？） 2. 協同活動（道路、用水路、警備など） 3. その他」。調査票 B 個人の8項社会生活に「A. ゴトン・ロヨン（助け合い／村の作業／その他）を行ったこと。（実施方法、時間、回数、決定者、代理の可否、態度と見解）」と記述されている [Lembaga PEM 1955]。

（注43）同書では、この7類型別にその自発性の度合いを分析し、さらに2村間における7類型の発生頻度の比較を行い、その発生頻度の差に基づく分析を行っている [Koentjaraningrat 1961:37-43]。

（注44）この報告書が書かれた1960年前後という時期を考慮すると、「この概念の提案者」とは、スカルノのことを指していると考えられる。

（注45）この点について論ずることは、本稿の趣旨、目的から逸脱するため別稿に譲ることとし、ここでは以下の諸点を指摘するにとどめたい。スハルト期における百科事典（例えば、クンチョロニングラットが人

類学分野の編者となっている Shadily (1980)), パンチャシラ公民教育の教科書（例えば、Kansil (1997)), その後のクンチョロニングラットの著作、教育文化省の一連のゴトン・ロヨン調査報告書等における「ゴトン・ロヨン」の取り扱い内容は、クンチョロニングラットがこのとき定めた「ゴトン・ロヨン」の概念を基礎とする内容になっている。

文献リスト

〈日本語文献〉

- 上野福男 1967. 「農村実態調査報告——ボゴール州スカプミ県スカプミ郡チサート村チマヒ区——」（所内資料 調査研究部 No.41-36 岸研究会 No.3）アジア経済研究所.
- 木村宏恒 1989. 『インドネシア現代政治の構造』三一書房.
- 楢沢英雄 2003. 「教育文化省による地方文化記録プロジェクトにおけるゴトン・ロヨン調査報告に関する一考察——東ジャワの事例——」『東京外大 東南アジア学』第8巻:147-153.
- 新村出編 1998. 『広辞苑』第五版 岩波書店.
- 関本照夫 1991. 「ゴトンロヨン」土屋健治・加藤剛・深見純生編『インドネシアの辞典』同朋舎出版.
- 土屋健治 1969. 「インドネシアの村落——中部ジャワ・ウォノギリ県ルジョサリ村の調査例——」『季刊東亜』第7集:74-93.
- 1984. 「19世紀ジャワ文化論序説」土屋健治・白石隆編『東南アジアの政治と文化』東京大学出版会.
- 1994. 『インドネシア思想の系譜』勁草書房.
- 戸田金一編 1995a. 『旧慣制度調査委員会議事録』全二分冊の一 発行所不明.
- 1995b. 『旧慣制度調査委員会議事録』全二分冊の二 発行所不明.
- 増田与 1971. 『インドネシア現代史』中央公論社.
- 見田宗介編 1988. 『社会学事典』弘文堂.

〈インドネシア語文献〉

- Kansil, C.S.T. 1997. *Pendidikan Pancasila dan Ke-*

- warganegaraan untuk SLTP Kelas 1* [中学校1年生用パンチャシラ公民教育]. Jakarta : Erlangga.
- Kartohadikoesoemo, Sutardjo 1953. *Desa* [デサ (村落) 論]. Jogjakarta : n.p.
- Koentjaraningrat 1974. *Kebudayaan, Mentalitet dan Pembangunan* [文化, 心性, 開発]. Jakarta : Gramedia.
- Kurasawa, Aiko ed. 1989. *KAN PŌ* Vol.1-Vol.5 [『官報』1巻～5巻]. Tokyo: Ryukeisyosya.
- 1992. *Djawa Baroe* Vol.3 [『新ジャワ』3巻]. Tokyo: Ryukeisyosya.
- Lembaga Penelitian Ekonomi dan Masyarakat, Universitas Indonesia, Fakultas Ekonomi 1955. *Penelitian Desa di Jawa dan Sumatra 1954-1956, Bagian 1* [1954-1956年 ジャワとスマトラにおける村落調査第1部]. Djakarta: Lembaga Penelitian Ekonomi dan Masyarakat, Universitas Indonesia, Fakultas Ekonomi.
- Nugroho, E. eds. 1997. *Ensiklopedi Nasional Indonesia*, 6 [インドネシア国民百科事典第6巻]. Jakarta: PT. Delta Pamingkas.
- Pusat Bahasa Departemen Pendidikan Nasional 2001. *Kamus Besar Bahasa Indonesia, edisi.3* [インドネシア語大辞典第3版]. Jakarta: Balai Pustaka.
- Satjadibrata, R. 1950. *Kamoes Soenda-Indonesia* [スンダ語インドネシア語辞典]. Djakarta: Balai Poestaka.
- Shadily, Hassan eds. 1980. *Ensiklopedi Indonesia, II* [インドネシア百科事典 第II巻]. Jakarta: Ichtiar Baru-van Hoeve.
- Soekarno, Ir. 1963. *Dibawah Bendera Revolusi. Djilid Pertama* [革命の旗の下に 第I巻]. [Djakarta]: Panitia Penerbit.
- 1965. *Dibawah Bendera Revolusi. Djilid Kedua* [革命の旗の下に 第II巻]. [Djakarta]: Panitia Penerbit.
- Yamin, Muhammad 1959. *Naskah-Persiapan Undang-Undang Dasar 1945. Djilid Pertama* [1945年憲法草稿 第I巻]. [Djakarta]: Jajasan Prapantja.
- 〈ジャワ語文献〉
- Poerwadarminta, W.J.S. 1939. *Baoesastra Djawa* [ジャワ語辞典]. Groningen, Batavia: J.B.Wolters' Uitgeversmaatschappij.
- 〈オランダ語文献〉
- Coolsma, S. 1913. *Soendaneesch-Hollandsch Woordenboek* [スンダ語オランダ語辞典]. Leiden: A.W. Sijthoff's Uitgevers-Maatschappij.
- Gericke, J.F.C. en T. Roorda 1901a. *Javaansch-Nederlandsch Handwoordenboek Deel1* [ジャワ語オランダ語中辞典 第I巻]. Amsterdam: Johannes Müller.
- 1901b. *Javaansch-Nederlandsch Handwoordenboek Deel2* [ジャワ語オランダ語中辞典 第II巻]. Amsterdam: Johannes Müller.
- Kolff, G.H.van der 1937. *De Historische Ontwikkeling van de Arbeidsverhoudingen bij de Rijstcultuur in een afgelegen streek op Java* [ジャワの遠隔地の稲作における労働関係の歴史的発展]. Batavia: Ruygrok&Co.
- Pigeaud, TH. 1938. *Javaans-Nederlands Handwoordenboek* [ジャワ語オランダ語中辞典]. Groningen: J.B. Wolters' Uitgeversmaatschappij.
- Vollenhoven, C.van ed. 1919. *Adatrechtbundels. 18: Gemengd* [慣習法集成 18巻]. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- 〈英語文献〉
- Bowen, John R. 1986. "On the Political Construction of Tradition: Gotong Royong in Indonesia." *Journal of Asian Studies* Vol.XLV, No.3 : 545-559.
- Dahm, Bernhard 1969. *Sukarno and the Struggle for Indonesian Independence*. Ithaca : Cornell University Press.
- Feith, Herbart and Lance Castles eds. 1970. *Indonesian Political Thinking 1945-1965*. Ithaca and London : Cornell University Press.
- Koentjaraningrat 1961. *Some Social-Anthropological Observations on Gotong-Royong Practices in Two*

- Villages of Central Java*. Ithaca : Cornell University.
- Raffles, Thomas Stamford 1994. *The History of Java*. Oxford: Oxford University Press.
- Sukarno 1965. *Sukarno an Autobiography: As Told to Cindy Adams*. Indianapolis: The Bobbs-Merrill Company (黒田春海訳『スカルノ自伝——シンデュー・アダムスに口述——』角川書店 1969年).
- Wilkinson, R.J. 1903. *A Malay-English Dictionary*. Singapore: Kelly & Walsh Ltd.
- 1932a. *A Malay-English Dictionary (Romanised). Part1*. Mytilene, Greece: Salavopoulos and Kinderlis Art-Printers.
- 1932b. *A Malay-English Dictionary (Romanised). Part2*. Mytilene, Greece : Salavopoulos and Kinderlis Art-Printers.
- Zoemulder, P.J. 1982a. *Old Javanese-English Dictionary. Part1*. Leiden: Koninklijk Instituut.
- 1982b. *Old Javanese-English Dictionary. Part2*. Leiden :Koninklijk Instituut.
- (東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程, 2003年 9 月24日受付, 2003年11月27日レビューの審査を経て掲載決定)